

満鉄調査部の農村調査

桜美林大学教授 中生勝美

わたくしの専門は社会人類学で、中國社会と文化の変遷を研究しており、近現代史にも足を踏み入れている。著作に『中国村落の権力構造と社会変化』（東京・アジア政経学会 1990年）および『近代日本の人類学史——帝国と植民地の記憶』（東京・風響社、2016年）があり、中国農村の社会、宗教、歴史およびに日本の人類学史を研究している。

今回の講演では、満鉄調査部が河北省と山東省でおこなった「北支農村慣行調査」についてお話しする。これは別名「華北農村慣行調査」として知られ、1938年に満鉄創業30周年記念

事業の1つとして提案された企画だった。当時、台灣總督府が後藤新平の指導で、京都帝国大学法学部の岡松参太郎教授を中心に実施した「台灣旧慣調査」や、白鳥庫吉が主幹した『満洲歴史地理』に匹敵する、満鉄調査組織にふさわしい企画として期待された。この企画は、東京帝国大学法学部の末弘嚴太郎（1888～1951）が打ち出した「生ける法」の探求という、従来とは異なる調査方針が提唱され、それまで満鉄調査部で実施していた満洲旧慣調査の方針とは異なるため、内部

來の項目ごとの記述ではなく、調査過程そのものを問いと答える問答形式をそのまま報告書にするもので、法学部としては、司法手続きが審問と答弁を記録する方式で、聴取のプロセスが直接復元できる手法として評価できるが、それまでの方法とは全く異なつていたので、反発が大きかったようだ。この調査は、戦後まとめられて岩波書店から『中国農村慣行調査』全6巻として出版された。戦後の肯定的な評価で、仁井田陞は次の3点を指摘している。

(1)『慣行調査』は植民地調査の系譜に属するが、純粹学問的調査であった。この「生ける法」の探究とは、從

(2) 調査目的が「生ける法」の探求であり、社会内部の現実構成をとらえようとした。

(3) 調査地が日本占領地区であったために、中国農村の内的変革への展望がなかった。

また、末弘の方法論が、生ける法の探究という法社会学の観点で調査をしたということで、法社会学からは、次のような評価がされている。

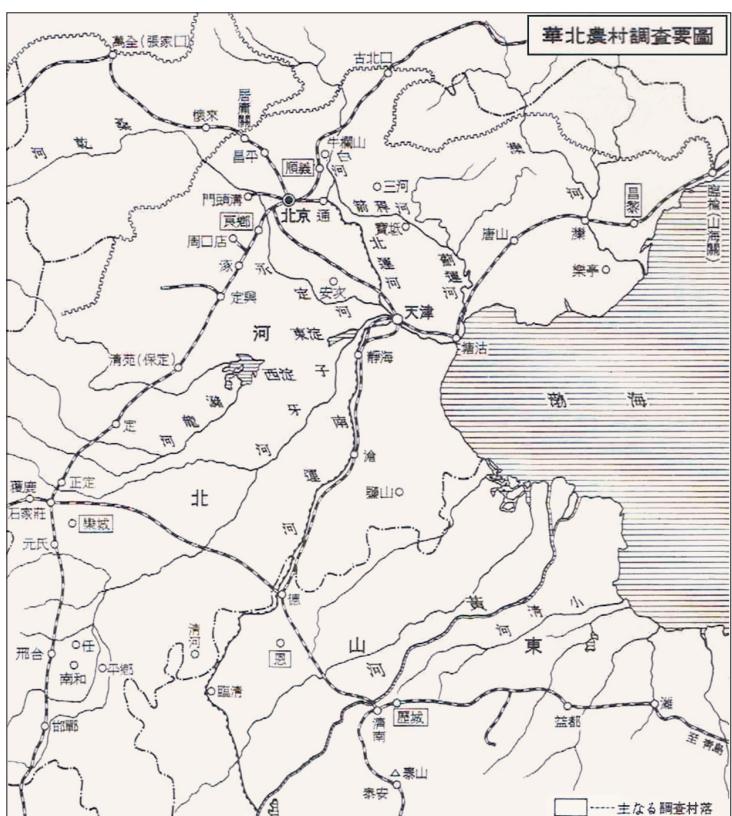
(1) 占領政策への消極的抵抗の立場をくずさず、学問的調査に徹しようとした。

(2) それを可能にしたのは、末弘の政策目的から離れて純粹に科学的な調査に徹しようとする学門的姿勢とユニークな法社会学理論にある。

しかし、否定的な意見も少なくなかった。第1に戦時中の調査であったということ。第2は通訳を使った調査であったということ。第3は調査対象者が有力者に限られていたということ。そしてその結果中国社会の内部的変革の展望がかくされていた。つまり革命に至るまでの中国内部の変革となり、社会内部の現実構成をとらえようとした。

る要因までは追求されていないということ。第4に、調査を組織した中心人物が末弘巖太郎を中心とする法学部の人たちで、報告書が、一般的な報告書ではなく、問答形式をそのまま掲載する形式であること。そのためもともと満鉄調査部の旧慣調査部にいた調査員たちからの評判が悪かったということもあった。

しかし、戦時中の調査が、それほど純粹学問的にできたのか、かなり疑問がある。近年、新しい視点で、末弘が主張する純粹学問的調査という主張への批判が、石田眞によつて展開されている。この論文は、従来とは別の角度から分析して、東亞研究所の「支那慣行調査」が、日中戦争開始後の「国策」遂行のために企画された占領地支配政策そのもの



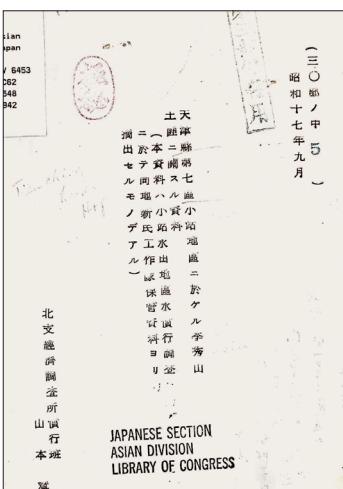
で、末弘巖太郎は当初からその政策に深く関与したことと明らかにしておる（石田眞「植民地支配と日本の法社会学」『華北農村慣行調査における末弘巖太郎の場合』『比較法学』36(1), 1~16, 2002）。上掲の地図は、調査地を示している。

『中国農村慣行調査』の調査内容の信憑性について、これまで文献資料を中心には検討が進められてきたが、筆者は、同じ調査地で関係者から直接話を聞くことで、その内容の検証を進めてきた。フィールドワークによる『中国農村慣行調査』の検証は、山東省済南市郊外から始めた。1983年10月から北京で語学研修をはじめ、休暇を利用して、天津の南開大学、山東省の山東大学へ調査地の選定のため、短期間の旅行をしました。そこで、山東大学は、満鉄調査部が調査した歴城県に近く、冷水溝まで自転車で1時間であることを確認したうえで、1984年9月から86年3月まで山東大学に留学しました。調査に入って、まず確認したのは、満鉄調査部が調査をした1943年から44年にかけての、北支駐屯軍と村人の関係だった。そして判明したのは日本兵が冷水溝にやってきて、地主を殺害したことだった。当時、日本兵は突然村に押し入ってきたので、多くの農民は畑に逃げた。運悪く捕まつた農民は、命乞いをしたが、頭の後ろか

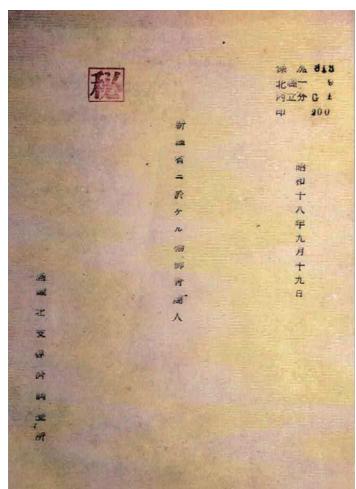
ら銃で打ち抜かれて即死し、多くの農民は畑の中から身震いしてその様子を見ていた。だから、農民は日本兵への恐怖心が植えつけられ、満鉄の調査員だった旗田巍、安藤鎮正の両氏に大きな心配があったのだ。それは応答の不正確さにも出ており、特に地主が殺傷されたとき、地主に関する聞き取りは、ほとんどが警戒心をあらわにしてまともに答えていない。

私の調査は、こうした現地での聞き取りと同時に、1980年代は満鉄調査に参加した関係者が多く存命で、彼らからも聞き取りをしている。私が調査を終えて日本に帰国したとき、満鉄の調査員として冷水溝を調査した内田智雄氏が健在だったので、電話をした。彼は冷水溝で村人と良好な関係を築いたから調査がうまくいったと言っていたが、日本兵が満鉄調査前に冷水溝を襲い、地主を殺害したので、日本人がやってくると、誰もが恐れおののき、満鉄の調査員と良好な関係などはなかったと伝えると、内田氏は絶句していた。内田氏と同じく、満鉄の調査員だった旗田巍、安藤鎮正の両氏にも、冷水溝で地主が殺害された話をしたところ、彼らも戦前に調査をしていたときに、調査地で日本軍からの被害を質問すると、すぐに憲兵隊に連行されるので、そのようなことは聞けなかつたと話していたのが印象的だった。

冷水溝のように、戦争の被害が直接



アメリカ議会図書館収蔵資料



天津社会科学院収蔵資料

調査に影響する。我々の調査も、慣行調査のことを覚えている人、その時期の状況などをどの村でも聞いて回ったが、なかなか慣行調査を覚えている人には出会わなかつた。しかし筆者は、後夏寒で慣行調査を覚えている老人と出会つた。このときのことを鮮明に覚えている。調査団は、午前と午後、宿泊施設から村公所までマイクロバスで向かうと、インタビューに応じてくれる農民が迎えに来ていて、各グループがそれぞれ家に向かつていた。筆者は応答してくれる家人の人とうまく連絡が取れず、1人村公所の入り口に取り残されてしまつた。ちょうどそのとき、入り口の前に2人の老人が座り込んでいたので、市場に出かけたのかとか、清明節が近いですねなど、よもやま話を始めた。清明節の時の墓参りについて話が進み、墓の位置などを尋ねて、地面上に墓の場所を描いて説明をし始めたとき、中年の男性が自転車で通りかかるて「何やつてんだ」と声をかけてきた。「昔のように考察団がきていた」と答えると、驚いて、「昔とはいつのことか、解放前か」と聞くと、そうだという。隣にいた老人もうなずいて、彼らが小学校の頃、眼鏡をかけた日本人が自動車に乗つて小学校へやつてきて老人から話を聞いていた、と話してくれた。彼らは、満鉄の調査員が小学校の授業の休み時間に子供たちが集まるアメをくれたので、恐れることなく日本人の周りに近寄つたことを鮮明に覚えているという。当時、日本軍は恩県の県城に5人が駐屯するだけだった。彼は1933年生まれで、小学生のときだから、満鉄の後夏寒調査は1942年5月から6月なので、時間的にも符合した。

確かに、満鉄調査員は通訳を通じた調査という限界があつた。しかし、だからと言って調査員と農民との関係は、支配者と被支配者のような緊張した関係だったのだろうか。私が1984年に、満鉄の重要な調査村の一つだつた沙井村を訪れたとき、旗田巍の調査に応えていた張瑞、張廣志が存命で、旗田巍のことをよく覚えていて、懐かしがっていたのは確かである。そ

れを帰国後、旗田巍に伝えると、やはり彼も会いたがつてていたのが印象的だつた。

満鉄は、確かに植民地経営をするために設立された会社であり、その調査部は満洲、そして華北の植民地経営の基礎となる調査をしていたのである。



沙井村（1984年8月） 左から筆者、張瑞、張廣志。この2人は、1940年代、満鉄調査部でこの村を調査していた旗田巍の主要なインフォーマント。

その調査規模は膨大で、中国の1930年代から40年代にかけての社会経済史を分析するためには貴重な調査資料であることは相違ない。しかし、その詳細さと便利さだけを称賛すると、その調査意図まで肯定しかねない。そこで、その調査の背景や当時の歴史状況なども含めて、丁寧に検討することで、その資料を活用することができるのである。

講演では、慣行調査に参加した山本斌について紹介した。山本は、東京帝國大学法学部卒業で、語学に天才的な能力があり、一度外国語を聞くと暗記してしまうので、中国に赴任して、すぐ中国語をマスターし、宿舎の隣にロシア人が住んでいたので、ロシア語もマスターしてしまい、また北京の雍和宮に行き、そこで修業しているモンゴル人やチベット人のラマ僧と交際してモンゴル語とチベット語までマスターしてしまった。

東京大学の教授だった福島正夫は、戦後山本の経営していた書店に、時々立ち寄ることがあったという。福島夫

人から伺つたが、福島は山本のことを「有能だけど、自由人なので研究職には向かない」と言っていたという。

山本は、『中国農村慣行調査』が出版されたとき、岩波書店の広報誌『図書』に福島正夫とともに、慣行調査の思い出を書いている。福島正夫は、慣行調査の学術的背景をまとめているのに対して、山本は、調査のプロセスを、かなり具体的に書いている。例えば、「入村する。村公所や村長宅は事実上我々の調査のため占拠される。村公所の営む自治事務の外に、日本軍の徴発、鉄道の賦役、県公署の徵税、新民会の訓練指令等が山積し、村民全体が困惑苦吟していた時代のことだ。村公所の使用丈でも、村の理事者にとって迷惑千万なことであった。村長、副村長、会首連は滞在期間中事實上釘付けにされ、村の扶役ツカイヲは聴取調査に呼出されれた村民の狩出しに大童であった」と、村に入つてから、その調査の対応に追われる村人の様子が克明に描かれている。

調査班は、村に経済負担をかけない

ために接待費、調査謝礼費を用意していたが、客を大切にする中国人から過剰に接待され、「この種経費が村としては巨額に達した証拠は、村費内訳を季末になって決算し、村民に公開するため、村公所の壁に貼られた条カケヅケ單に満鉄班費の1項目があつたことである。この経費が事変のためにギリギリの生活に追いこまれていた農民諸君のナケナシの財布の底を叩かしたのである。もとよりこの条單も我々調査の対象として取上げられ、御馳走になつた金の出処まで詳細に調べあげることになるのであつたから、まったく驚嘆に値する程の失礼な客であつたのである」と、他の調査員の回顧録には書かれていないのであつたから、まさに支配者による調査の実態を書いている。その後も、調査の様子を続けているが、最後にもう一度調査村に行き長年の非礼を詫びたいと結んでいる。山本は言葉ができるがゆえに、他の調査員とは異なつて農民との距離が近かつたことを窺わせる。

山本斌は、著書『中国の民間伝承』

の移住伝説に関心を持ったと書いている。慣行調査が進展し、北京近郊の順義県だけでなく、河北省の欒城県や昌黎県と広がっても、同じような伝承を聞くので、大槐樹の存在を突き止めた思いが強くなり、ついに1941年8月に山西省を縦断する同蒲鉄道を南下して洪洞県まで行った。

山本が担当したのは、小作慣行と水利に関する慣行で、担当地域の順義県沙井村・欒城県寺北柴村・昌黎県候家當村で小作について報告書を書いていたが、これらの地域は河川がない地域だったので、その後は天津近郊の大河川地帯の農村調査を単独で行なった。

先に述べたように、山本は語学に才能があったので、慣行調査の仕事が終息したのち、内モンゴルの調査などにも借り出されているが、それとほぼ同じ時期に、天津近郊で水利調査もしている。その中で、『新疆ニ於ケル楊柳青人』のように、年画でも有名な天津近郊の楊柳青の商人が清朝末期から新疆へ出稼ぎに行っており、日本軍の西北工作に必要な新疆情報を、楊柳青の商

人とその家族、そしてかつて新疆へ行つたことのある商人などから聞き取つて報告書を書いている。

また、今年の夏、アメリカのワシントンDCの議会図書館を訪ねたときに見つけた、「天津県第七区小站地区ニ於ケル李秀山土匪ニ関スル資料」のよ

うに、新民会（日本の華北占領地に設置された民衆の親日化工作をする民衆機関）の工作隊が保管していた土匪（地方の盗賊団）の組織、成員、家族構成、所有する不動産とその地形図まで含めた詳細な報告書を書いている。

筆者略歴（なかお かつみ）

専門は社会人類学、中国近現代史。

著作に『中国村落の権力構造と社会変化』（東京・アジア政経学会、1990年）。『近代日本の人類学史——帝国と植民地の記憶』（東京・風響社、2016年）。中国農村の社会、宗教、歴史および日本の人類学史についての論文多数。

山本斌の、こうしたきわどいテーマでの調査は、必ずしも満鉄の慣行調査が、国策を基礎にして実施していたのではなく、山本の個性的特性で書いたものだと思う。山本斌については、別稿を書いているので、そちらを参考にしてほしい。

中生勝美「歴史認識と人類学——満鉄資料『新疆ニ於ケル楊柳青人』の分析を通じた日本帝

国主義の新疆戦略」『桜美林論考、人文研究』(5)、110—118年(1月、二六七—一八) [頁]。

https://obirin.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_w_main&active_action=repository_view_main_itm_detail&item_id=1984&item_no=1&page_id=3&block_id=38

(2022年10月19日・オンライン公開講演会)